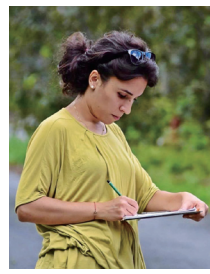


● シリーズ 私の見た日本 Vol.191

日本とトルコの伝統建築の比較

Elif Berna Var (ヴァル・エリフ・ベルナ)

トルコ共和国トラブゾン出身。2012年イエディテペ大学工学・建築学部建築学修士号、2013年イエディテペ大学美術学部ランドスケープ・アーキテクチャの修士号、2015年イスタンブール工科大学科学技術研究所都市計画修士号、2019年京都大学大学院地球環境学舎地球環境学専攻(博士後期課程)修了、地球環境学博士。2019年8月から東京文化財研究所・文化遺産国際協力センターにてアソシエイトフェローとして勤務



トルコ北東部の沿岸都市で生まれ育った私は、高層マンションに住み、自然と触れ合う機会はほとんどなかった。7歳のときに一時的に日本に在住した際の住居は、小さな庭に囲まれた2階建ての伝統住居であり、幼いながらも、日本とトルコの住居に多くの違いを感じたことを今でも覚えている。そして、日本で建築を勉強して初めて両国の住居には共通点があることに気がついた。本稿では、日本とトルコの伝統的な建築の違いと共通点を共有するとともに^{*1} (図1)、日本の建築の好きな点に関して私の考えを述べたいと思う。

日本の伝統的な建築の魅力として、室内と室外の空間が密接に関係していること、襖や障子のような可動式建具、さらに囲炉裏などが挙げられる。

よく知られていることだが、日本の伝統住居は自然との関係性を重視して設計されている(図2)。そのため、自然素材を活用したその土地の気候や地形、文化、生活様式と調

和したつくりになっている。また、日本建築における建具の使い方も興味深い。内外のわずかな仕切り、障子を透ける柔らかな自然光がつくる陰影、襖を開けたときの景色など、これらは個性的な特徴である。建具を開けると庭や中庭が広がり、自然のなかに家が広がっていくように感じられるが、この点において日本とトルコの伝統的な建築は異なっている。トルコ人も自然を大切にしているが、宗教的かつ文化的な背景から家族のプライバシーがより重要視されるため、トルコの伝統住居は通りに面した1階部分には小さな窓しかない、またはほとんど窓がないようなものも見られる(図3-1)。1階は厩や物置として使用され、家族の生活圏は2階から始まる。庭に囲まれた伝統住居形式もあるが、外部の人の目に触れることがないように庭や中庭は厚い塀で囲まれている(図3-2)。塀で通りから遮られていることで、住人たちは自分たちだけの自然があふれる景色を楽しむことができるのである。

囲炉裏もまた日本の伝統住居の魅力の一つである(図4-1)。囲炉裏は、人々が集い、語り合い、料理をし、休息をとる、伝統的な日本家屋の中心となる場所の一つだ。特に囲炉裏の上から吊るされた美しい装飾品は、外国人である私の目を引きつける。トルコにも「オジャク(ocak)」と呼ばれる暖炉があり(図5)、リビングとキッチンとして使われる大空間である「アシハーネ(aşhane)」の中心部であるとされている。囲炉裏とオジャクを比較してみると、機能は似ているが、囲炉裏には鍋や釜を掛けて吊るすための魚をかたどった自在鉤など、装飾的なものが一般的であるのに対し(図4-2)、オジャクには装飾のない簡素な吊り具が用いられる。

建築的な部分以外にも、日本の伝統住居には興味深い構造的な特徴がある。身体尺、建築計画の柔軟性、屋根の構造(特に茅葺き屋根)、木材の接合部分のディテールなどが魅力であり、これらの点についてトルコの伝

統的な建築との比較を通して、私の考えを共有したい。

日本で受けた講義で、初めて身体尺を知ったときの衝撃は今でも忘れられない。私はそれまで伝統的な家屋の設計に身体尺が用いられていることを知らなかったが、調べていくうちに、身体尺は日本だけではなく世界各地の伝統的な家屋の建設においても一般的な手法であることを学んだ^{*2}。トルコの伝統的な家屋も、職人や施主の身体尺を利用して建てられていたようである。例えば、基本的なモジュールは主に片腕の肩から中指の先までの距離で決定され、天井高は天井にその家屋の住人の手が触れないような寸法を用いる、といった例が見られる。

日本とトルコの伝統住居は、建築計画や建築形態は異なるものの、どちらも家族の規模の変化に応じた拡張性をもっている。このことから私は、伝統的な住居は実はダイナミックで有機的な「生命体」であるという仮説を立てた。すると、平面計画の変化は家族の構造や生活様式へのヒントを与えてくれるものと考えられ、その変遷を追うことはとても示唆に富んだものに思えた。

この柔軟性は、釘を使わずに建てられた建物のシンプルな幾何学的形態の賜物でもある。塗料、釘、接着剤、ねじを使わずに木材同士を接合する技法は、日本の伝統的な建築の特徴の一つである。この高度な大工技術が構造物を分解して組み立てることを可能にしている。私は構造物の持続可能性と柔軟性もまた、日本建築の特徴であると考えている。興味深いことに、森林地帯のトルコの伝統住居においても同様の特徴が見られる。私が博士課程の研究を行った森林地帯のトルコ北東部黒海地方の地域では、伝統的な住居は木材同士を接合する継手の一種である、ほぞ継ぎの技法によって建てられている(図6)。実際に家主に確認したところ、その柔軟性を



図4 左(図4-1) /日本の伝統住居における囲炉裏 中(図4-2) /装飾的な自在鉤
図5 右/トルコの伝統住居における「オジャク(ocak)」



図6 トルコの伝統住居におけるほぞ継ぎ

活かしてほかの村から現在の場所に家を移築したという人もいた。両国の伝統住居の木材同士を接合する技法についても、日本の伝統住居における技術やディテールはトルコのものよりもはるかに複雑ではあるものの、接合部に装飾的な要素が施され美的価値を高めていることは、両国に共通しているのではないだろうか。

本稿では、日本とトルコの建築のいくつかの特徴を簡単に比較した。ほかにも特徴を挙げることは可能だが、日本の建築について私が特に気に入っている点に限定し、トルコの例との関連性を考えた。文化の違いによって形成された建築形態の違いであるにも関わらず、両国の伝統的な住居には実はあまり知ら

れていない共通点がある。保存修復の分野で研究をしている者として、その背景にある理由を理解するために、また、5年間住んでいる日本と自分の故郷であるトルコとの関係をより明らかなものにするためにも思索を深めていきたいと思う。

^{*1} 本稿で使われている「トルコの伝統的な家」とは、トルコと日本の伝統住居を相互に関連付けるために木造の伝統住居のことを指す。読者のなかには、石づくりやレンガづくりを想像する人もいるかもしれないが、トルコは気候条件の異なる地域を含む広大な国であるため、特に北東部の黒海地方をはじめとする降雨量の多い地域では木材も建材として使用されてきた。そのため、本稿で解説する「トルコの伝統住居」は主にそのような地域を対象としている。

^{*2} 2 出典: Bektaş, C. (2018) .Türk Evi [Turkish House, in Turkish] (pp.40), Istanbul: YEM Yayın.

(翻訳: 京都大学大学院工学研究科 建築学専攻修士課程学生 中村友彦)



図1 上/トルコの伝統住居
下/トルコの伝統住居のファサードの詳細



図2 上/障子による柔らかな光
下/建具を開放することによる内外の境界の消失



図3 上(図3-1) /1階に窓をもたないトルコの伝統住居
下(図3-2) /中庭の様子